

小川笙船

定吉はもう、動けなかった。うすれてゆく意識の中で、江戸の町を歩き来る人々の足音だけが聞こえている。

定吉には、家族はいない。一人、長屋に住み、魚売りで生計を立てていた。しかし、病をわずらい仕事ができなくなった。家賃がはらえず、長屋を出された。ねる場所も、食べるものもなく、道にたおれた。すっかりやせ細り、よごれた身なりで苦しんでいる定吉に声をかける者はいなかった。

しばらくすると、定吉の手を取り、脈をたしかめ、「しっかりしろ。」

と声をかけた男がいた。その男は連れのものに、定吉を背負うように言った。

定吉は、となりにねている男のうなり声や、薬をゴリゴリと調合する音で目が覚めた。(診療所か……、助かったのだ……。) なみだがこみあげてくる。しかし、次の瞬間、定吉はここからこっそりとぬけ出すことを考えた。金がないのだ。だが、にげ出す力もつとない。そこへ、さっきの男があらわれた。

「気付いたか。よかった。しばらく、ここで養生して病を治すんだな。」
おだやかな声が、定吉の胸にひびく。でも定吉は

「ふん、おいらは病気……なんかじゃねえ。たのみもしないことを……してくれやがった。」

と、とぎれとぎれの声で、いきまいた。男は、定吉の顔をしばらく見た。

「金の心配なら、しなくていい。」

そう言っつて、脈をとるために、ふたたび定吉の手をとった。ごつごつと大きな強い手が定吉の手をつつむと、定吉は静かに目をとじた。定吉の目からあふれるなみだは、ほおを伝わり、首をぬらしていた。

「ゆっくりと休むことだ。」

そういって、男は部屋を出て行った。

男の名は小川^{おがわ}笙船^{しょうせん}。江戸の町でも有名なうでのよい医者だった。身分の高い者たちは、高い診療代^{しんりょうだい}をよけいに包み、もてな

し、笙船を大事にしていた。そのような者たちだけを診療していても十分にゆたかなくらしをしている。それでも笙船は、貧しく^{ます}医者にかかる金もない者にも手厚く診療をほどこした。江戸の町には、定吉のような家も身よりも金もない病人がたくさんいたのだ。助かる者はいい。手当てをしても、死



んでいく者も多く、笹船は胸をいためていた。

そのころ江戸では、貧しい病人は、笹船の診療所では受け入れられないほどの数になっていた。笹船は、殿様にこの事実を伝え、ついに、殿様の命令で貧しい者たちが安心して診てもらえる小石川養生所がつくられた。そして、笹船はそこを取り仕切ることになった。養生所は何百人もの患者であふれかえった。自分と同じ志のある若い医者や養生所によびよせ、治療の仕方を実際にやって見せて学ばせた。多くの病人の診察や、若い医者たちへの指導で、笹船は目が回るような毎日であった。

しかし、どんなにつかれています、夜には若い医者にまかせた治療がまちがっていないか確認した。そして、若い医者たちのなやみや疑問が書かれた日誌に夜おそくまで目を通し、一人一人に声をかけ、つかれた体をいたわった。一方で医者としての姿は厳しく示したのである。

こうして、志ある医者や薬となる薬草を育てながら、定吉にしたように手あつく、まずしい病人の面倒を見た。



はらう金もなかった定吉は、養生所の井戸から水をくむ仕事をし
て、笙船への恩返しおんをしていた。

ある日、水をくんでいると、あの日、となりでねていた男が、自
分の畑でとれたたくさんの大根を養生所に届けとどにきた。この男もい
まだに金をはらえずにいた。

「先生、先生はおられるかあ。先生に食べてもらおうじゃー！」

男は、すっかり元気になっていた。土だらけの手で背負っていた
かごをおろし、笙船の姿を見つけると、日に焼けた顔は満面の笑顔
になった。

笙船もまた、うれしそうだった。笙船は男とかごに手を合わせた。
そして、大根のかごを受け取り高々とかけると、養生所にはみん

なの笑顔と拍手はくしゅの音が広がった。

笙船のおかげでできた養生所はその役割やくわりを終え、現在は小石川植物園となっ
ている。植物園の中には、笙船や貧しい江戸の町人のたくさん思いとともに、
今も、井戸がひっそりとねむっている。

